

今日の空手 —空手史逍遙—

第2回

2023年6月20日 → 1895年6月20日

Back to 128 years ago

「今日の空手」第2回は、今日（2023年6月20日）から128年前にあたる、1895年6月20日へのご案内いたします。

義村朝義、尚本家へ参内す！

1895年6月20日、義村朝義が東京の尚本家を訪問し、そのころ尚家と旧支配者層を中心に行われていた公同会運動へ反対する旨の書面を上呈しました。

公同会運動とは言わば復藩運動のことで、旧王家である尚家をして世襲の沖縄県知事とする特別制度の確立を求める運動のことです。この運動は最終的には頓挫するのですが、県内でなんと73,322筆を数える署名を集めていました。当時の沖縄の人口が50万人程度であることからすると、かなりの支持があったと言えそうです。また、明治29年に公同会が出した請願（「公同会趣意書」）には、署名者代表として4人の名が記されていますが、この中の一人として「唐手」の大家・安里安恒の名もあります。

しかし、そのような多くの人々から支持を得ていた公同会運動に対し、なぜ朝義は反対の姿勢をとったのでしょうか。これを理解するためには朝義の父、義村朝明のことを知っておく必要があります。

父・朝明はいわゆる頑固党の領袖で、琉球の日本化に反対の立場をとる人物でした。そもそも「沖縄は日本の中における一つの県」という前提に立脚した公同会運動を、朝明には認めることができなかったのでしょうか。そしてこれに反対意見を述べるため、同年6月12日、子の朝義を伴って琉球を出立したのでした。17日には神戸（兵庫県）に到着するのですが、ここで尚本家から派遣されてきた喜屋武朝扶（喜屋武朝徳の父）と比屋根安栄十によって、尚泰（旧琉球王）が病気であることを理由に東京の尚本家行きを断念させられました。ここからどのような経緯があったのかは不明ですが、随行していた朝義が単身で尚本家へ行くことになったのです。

こうして6月20日、朝義は尚本家へ参内をするのですが、やはり尚泰を拝することはできず、家従・久志助法に書面を手交して、その任を果たしたのでした。

それにしても、武術家・空手家らが交叉する人間模様にも興味深いところがありますね。

—鶏肋—

†比屋根安栄は王府最後の評定所筆者の一人、置県後は尚本家外事課に奉職した。宗教学者の比屋根安定は子。
‡久志助法は王府最後の評定所筆者主取、置県後は尚本家外事課に奉職した。〃幻の女性作家、久志美沙子は孫。

草莽居士

(2023年6月20日掲載)